

2011年度(上半期)事業報告

●広報委員会

・学会ホームページの充実  
・福祉文化通信第60号発行  
・メルマガの発行

●研究委員会

「新」福祉文化シリーズ5  
福祉文化の源流と前進」発行に  
向け、準備

2011年度(下半期)事業計画

●企画員会

・第2回アクティビティ・ケア実践フォーラムの開催  
・テーマ「震災後のアクティビティ・ケアの重要性とこれから(仮)」日時：2011年10月29日(土)1時～

東日本大震災の対応について(7月22日現在)

日本福祉文化学会では、この度、独自の「震災支援方針」を決定しました。この「震災支援方針」に基づき、着実に被災地支援を行っています。

1. 日本福祉文化学会として、既に、「NPO法人全国ユニティライフサポートセンター」や「救屋川・つなぐプロ」などの被災

30日(日)

会場：立教大学 池袋キャンパス  
(東京都豊島区)4号館

●広報委員会

・学会ホームページの充実  
・メルマガの発行

●研究委員会の活動報告

「新」福祉文化シリーズ15「福祉文化の源流と前進」発行10月目次

【I】 一番を語らぬ福祉文化の源流をたどる

【II】 福祉文化の21世紀における展開

【III】 福祉文化についての論点

【IV】 第20回東京大会と第21回長崎大会のこと

地支援をしている団体に義援金・支援金(10万円)をお送りしました。

今後、これらのお金などのように使われているのかをフォローしていきます。

2. 事務局をとおして、東北プロット会員へ「お見舞い状」をお送りしました。

3 「東日本大震災支援金箱」

2011年5月20日

日本福祉文化学会としての東日本大震災支援の基本方針

震災対策委員会委員長 石田 易司

3月11日のあの震災から2か月あまりたちました。私も何度か被災地に足を運びましたが、道路こそきれいになりましたが、また、場所によっては日常を取り戻しているところもありますが、多くの被災地は1週間後の3月18日に初めて見た様子とはほとんど変わっていないというのが印象です。つまり、あまりにも広域で甚大な被害を受けた被災地の支援は、目に見える復興だけでも長い期間で取り組まないとはいけません。さらに、一人ひとりの心の問題や仕事、文化など形にならない支援は、数年、あるいはそれ以上の長い期間を想定して取り組む必要があります。

また、私たちに大きなお金もありません。フルドナーのような方に頼る支援も出来そうにありません。長い期間にわたって、根強く、私たちの知恵や技術を使った支援を続けなければなりません。

そのために、次のことを福祉文化学会の支援の基本的で具体的な方針にしたいとおもいます。

- (1) 支援活動は数年にわたる継続的な活動にします。
- (2) 皆様からお寄せいただいた寄金は、直接的な被災者との活動に使い、そのために必要な交通費や食費などは私たち自身の負担とします。
- (3) 活動は、広く全被災地に行き渡る活動、また1回限りの活動というより、先進的な活動をしている会員からの情報に基づき、被災者と心と心が通い合うような、定点の繰り返しの活動を主にします。
- (4) しかし、学会のもっとも得意とする研究活動については、広く全被災地を対象にし、全会員の方を結集する必要もあります。研究のテーマとしては、阪神淡路大震災以来日本社会に根付いてきた、「災害支援ボランティア活動の動向」などを考えています。
- (5) 学会大会も、今年に限り、被災地をこの目で見、少しでも被災者と触れ合えるように、被災地のどこかで実施したいと考えます。(予定されている大阪が被災地であるかの最終的な決定は7月2日の理事会でします)
- (6) 当面、この方針で活動を続け、しかるべき時期に見直し、新たな展開も可能にします。

「お読み」『東日本大震災支援金箱』について

日本福祉文化学会では、すでに現地で活動をしている団体に支援金を送りましたが、今後、長期的に被災地の復興を支えるためには、臨時の活動資金が必要になります。そこで支援金振込口座開設いたしました。本学会としての復興支援活動にご賛同の方は、下記の口座へお振込みいただけます。

送金口座：郵便振替  
口座番号：0058804448506  
加入者名：日本福祉文化学会  
「震災支援義援金」または「支援金・寄付」と明記し、お送り下さい。

理事紹介

日本福祉文化学会  
会員のみなさんへ

理事からのメッセージ④ 島田治子(目白大学)



企画委員会の大きな仕事の一つは、1年半後に開催が決定していた東京大会を、多摩大学大会実行委員長のもと、20周年記念にささげたい内容で行うことである。さまざまな問題提起があったことも含めて、本学会が河東田尚新会長のもとで再スタートを切るのにかかわり大いに

証ってもらったため、公開公募とした。個別ケアが望まれる時代に、地域性豊かな文化が福祉実践に果たす役割は大きいのではないかと考えている。(この企画の具体的実践に携わっている「福祉文化研究」Vol.20を参照)

福祉文化通信

2011.9.1 vol.66

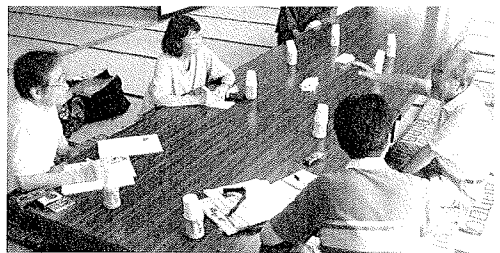
●編集委員 湯原 美貴 稲田 泰紀 河西 正博  
●デザイン・印刷 飛来社

～well-beingへの道～

日本福祉文化学会事務局 〒166-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunkabito@nifty.com

新聞、テレビ、雑誌などメディアの現場で長く仕事をしていたため、大学ではメディア表現学科に所属し、メディア関係の授業を持っていた。それがなぜ本学会会員なのかというと、取材テーマの一つに「高齢者と認知」があったからだと、私としては「ネタ探し」というくらいのもりで入会したのだ。真平な勉強をたくさんさせてもらったので「そろそろ学会のために働こうかな」とお考えの会員が多かったのだろうか。2005年の選挙で評議員に選ばれ、企画委員担当理事となった。

企画委員会の大きな仕事の一つは、1年半後に開催が決定していた東京大会を、多摩大学大会実行委員長のもと、20周年記念にささげたい内容で行うことである。さまざまな問題提起があったことも含めて、本学会が河東田尚新会長のもとで再スタートを切るのにかかわり大いに



午後には近くの御茶屋街へ行き、境内で自主避難所を運営していた自派会長の内守雅之さんに、解散までお話を中心にうかがった。自主避難所の運営が非常にスムーズだったのは、もともと、お祭りのみこしを仲立ちに、由緒の伴ったお祭りの仕立とのつながりがある地域だったことが大きい。食料、燃料、炊事道具、技術、労力等、自分が提供できるものを出して助け合うという理想的な空間が誕生した。致々の示唆に富んだお話を聞いた。そうした人の繋がりが地盤だった。自治会長の後継者候補を悩ませていくというお話を、一番考えさせられてしまった。

(被災地訪問プロジェクトの詳細は、本誌中巻、左頁を参照)

